

問題・解答
用紙番号

24

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、外国語学部、経済学部、経営学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

一九世紀末から二〇世紀前半の日本は、台湾と朝鮮半島を植民地とし、さらに中国東北地方を実質的に支配した。その支配の過程で「植民地建築」が成立した。この植民地建築について述べた次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(五五点)

二〇〇八年八月二六日、ソウル市は、それまで市庁舎として使っていた旧京城府庁舎の取り壊しを始めた。ソウル市は、新市庁舎の建設にともなう市庁舎移転に合わせて、旧市庁舎を図書館に転用することを決めていたが、旧市庁舎が老朽化していることを理由に、外壁など一部を残し、他の部分はいったん取り壊し、レプリカを作って図書館に転用するという計画であった。ところが、韓国文化財庁は、ソウル市の計画に反対し、取り壊し工事が始まると、その日のうちに、史跡に仮指定し、ソウル市の工事を中断させた。このソウル市と韓国文化財庁との対立は、日本の新聞でも報道され、話題となった。

この対立は、歴史的建造物が老朽化を理由に建て替えられるときに起きる一コマとして、日本でもよくあることだ。しかも、ソウル市の計画には、既存部分を壊したところにレプリカを作るというもので、この手法も、日本でもときどき問題になっている。

A、今回の場合、単なる歴史的建造物の保存という問題ではなく、建物が植民地建築であるがゆえに、植民地建築の現在を考えるうえで^{かっさう}恰好の題材となった。旧ソウル市庁舎は、朝鮮総督府庁舎のラクセイから^あわずか一か月後の一九二六年一〇月三〇日に竣工した建物であり、朝鮮総督府庁舎とともに、当時の京城市街地を一変させ、朝鮮総督府による京城の近代化を示す建物であった。そして、もちろん、朝鮮総督府庁舎とともに、植民地支配を象徴する建物の一つでもあった。

旧朝鮮総督府庁舎は、一九四八年に大韓民国が成立すると、その政府の中央庁舎として一九八四年まで使われた。そして、中央庁が首都機能の移転にもなつてソウルの南方にある果川に移転すると、韓国国立中央博物館に転用され、一九八六年のアジア大会に合わせて開館した。ところが、一九九三年、当時の細川首相と金泳三大統領との間で日韓新時代の創出が合意されると、一転、旧朝鮮総督府庁舎の取り壊しが議論される。結局、朝鮮王朝の王宮であつた景福宮の復元をという大命題のもと、その復元にあたり邪魔ものである旧朝鮮総督府庁舎の取り壊しが決まった。そして、日本の敗戦から五〇年目にあたる一九九五年八月一日から取り壊し工事が始められ、およそ一年後、旧朝鮮総督府庁舎は地上から姿を消した。

このとき、ソウル市庁舎として使われていたのが旧京城府庁舎であつた。ところが、二一世紀になり、二〇〇二年のサッカー・ワールドカップ日韓大会では、韓国チームを応援する群衆がこの市庁舎前の広場に集まり、市庁舎の外壁に設けられた大画面を見ながら「テハンミング」と声を上げた。この光景は二〇〇六年のサッカー・ワールドカップのときにも再現された。そして、人々はいつの間にか、この市庁舎前をソウル市庁舎前広場と呼ぶようになり、市庁舎は広場の背景として存在するようになった。元来、この場所は、ソウル市の都心として無数の車が行きかう重要な交差点であり、広場ではなかつた。韓国代表サッカーチームの応援が広場を作つたともいえるが、それだけでなく、ソウル市庁舎がそこに存在したがゆえに、市庁舎前広場が成立したのである。この間、二〇〇三年には、この建物は文化財登録された。旧朝鮮総督府庁舎の取り壊しが決まってから一〇年の歳月が流れていた。

そして、今回のソウル市と韓国文化財庁の対立は、ソウル市庁舎である旧京城府庁舎の存在を改めて考える機会となつた。ソウル市は、市庁舎が市庁舎前広場の背景になつてゐることを認めており、そのため、外壁の保存を考えた。しかし、それはあくまでも市庁舎前広場の背景としての外壁の存在を考えたにすぎず、外壁を保存すれば、老朽化している他の部分は、いったん取り壊して、レプリカを建設すればよいと考えていた。

B 韓国文化財庁は、ソウル市の視点とはまったく異なる視点から、旧京城府庁舎を評価した。韓国文化財庁は、この庁舎を植民地時代の苦難な歴史を示す建築とし、史跡の仮指定をおこなつた。これは、韓国文化財庁が、植民地建築の価値を認めたこと、植民地建築の存在を認めたこと、を意味している。したがつて、韓国文化財庁にとって、ソウル市のようにレプリカを作るといふことは文化財の破壊につながり、絶対に容認できるものではなかつた。二一世紀に作られるレプリカはあくまでも二一世紀の建物であり、形態が取り壊し前とそっくりであつたからといつても、それが二〇世紀に建てられた植民地建築になることはありえない。

今回起きたソウル市と韓国文化財庁の対立は、韓国における植民地建築の扱いを一変させたものであり、また、韓国に限らず、日本の植民地建築の評価が、絶対的なものではなく、相対的なもの

であることも示してくれたといえる。そして、日本が支配した時間よりも、その後の時間が長くなった二一世紀において、植民地建築とどう向き合うかを改めて考え直す題材となった。

植民地建築が日本の支配の象徴とみなされるのは、当然のことであり、植民地建築の宿命である。そのため、一九四五年、日本の敗戦とともに、植民地建築は壊される運命になった。しかし、実際には、取り壊された植民地建築は少なく、積極的に取り壊されたものは各地に建てられた神社や忠霊塔のみであった。これには、二つの状況が混在していた。一つは、当時の社会状況において、植民地建築である既存の建物を使わざるをえない状況である。もう一つは、植民地建築を新たな政権が使うことで権力の移行を示すという状況である。

前者について、このような状況は、韓国では一九七〇年代まで、台湾や中国東北地方では一九八〇年代まで続いた。いずれも、急速な経済発展、すなわち、韓国では、朴正熙政権下における漢江の奇跡と呼ばれた経済発展、中国では鄧小平政権による改革開放路線の経済発展によって市街地に新たな建物を建てる経済的余力が生じると、支配の象徴として存在した植民地建築は建て替えられる運命にあった。建て替えることが、支配の克服であり、建て替えによって生まれた新しい建築は、支配された時代よりも発展したことを示す象徴であった。景福宮の復元という目的を掲げながらおこなわれた旧朝鮮総督府庁舎の取り壊しは、この究極の事例であった。その取り壊し工事が、日本の降伏から五〇年目にあたった一九九五年八月一五日から始まったことは、景福宮の復元の陰に旧朝鮮総督府庁舎の取り壊しが隠れていたことを示していよう。

後者について、その象徴的存在は、旧台湾総督府庁舎と旧関東軍司令部である。国共内戦に敗れた中国国民党政権は、台湾に移ったが、その際、旧台湾総督府庁舎を中華民国總統府庁舎として使い、今日に至っている。これは、台湾総督府から国共内戦を経て中華民国政府（台湾政府）に権力が移行したことを示すものであり、この庁舎にはその象徴性が存在した。かつて、台湾の紙幣にこの庁舎が印刷されていたのは、それを示していよう。一方、国共内戦に勝利した中国共産党が各地で組織した地方委員会は、それぞれ、市街地の中心にある建物を庁舎として使用した。そのテンケイは、中国共産党吉林省委員会であり、旧関東軍司令部をその庁舎として使った。満洲国政府を傀儡政権として中国東北地方の支配の実権を握っていた関東軍司令部の庁舎を吉林省に君臨する中国共産党の組織が使うことで、権力の移行を示したのである。

したがって、旧台湾総督府庁舎や旧関東軍司令部は、決して取り壊されることのない建物であった。新たな権力者がそれを使うことで、権力の移行を示したのである。

ところが、経済発展が進み始めると、植民地建築に対する新たな動きが生じた。植民地建築も歴史的建造物の一つとして、その文化的価値、あるいは社会的・文化的遺産としての価値を認めること、さらに、都市再開発のために都市の資産として活用するという動きである。

この動きは、学術の分野と実際の文化財保護や都市再開発事業の分野で始まった。韓国では、建

築史家・尹一柱が植民地建築を韓国建築史の一部として取り込んだ『韓国・洋式建築八〇年——解放前篇』を一九六六年に著して以来、一九八五年に亡くなるまで多くの論著を通じて、植民地建築の建築史学的位置づけを試みてきた。植民地建築そのものの存在を否定する社会的フウチョウが強い中で、研究には多くの苦難ももなったが、彼の研究は、その後、金晶東、尹仁石に引き継がれ、結果として、冒頭で紹介したような文化財庁によるソウル市に対する旧京城府庁舎の取り壊し中断命令を引き出すこととなった。金晶東や尹仁石は、韓国近代建築に関する悉皆調査を始め、植民地建築を改めて韓国建築史の中に位置づける試みを続けている。

台湾では、建築家・李乾朗が一九七九年に『台湾建築史』を著し、日本の植民地建築を台湾建築史の中に組み込んだ。中国では、東京大学を中心とした日本アジア近代建築史研究会と清華大学を中心とした中国近代建築史研究会の共同調査による近代建築調査が一九八八年から始まり、その成果として『中国近代建築総覧』という統一名称の下に都市名を付した調査報告書が一五都市について刊行された。中国東北地方では、ハルビン、瀋陽、大連がその対象都市となり、日本の植民地建築も調査対象物件となった。これにより、とくにハルビンと瀋陽では、個別建築の調査研究とともに、外国の支配を受けた時期の建物も自国の近代建築の一部として取り込みながら、位置づけ、それを含めた各都市の建築史に関する研究が進みはじめた。

C、ハルビンでは、この近代建築調査に先行するかたちで、ハルビン市政府が一九八四年から、市街地に残る一九四九年以前の主要な建物を保護建築として保存する事業に着手した。これは、実質的に東清鉄道による市街地建設に合わせて建てられた建物や満洲国に関係する建物を保護の対象としたものであり、旧東清鉄道本社など七四棟の建物と、それらが集中する広場や街路が保護の対象となった。また、大連でも、市街地の中心にある旧大連大広場に面した九棟の建物を保存建築として、円形広場のケイカンとその雰囲気の保護を図った。この広場には一〇街区が面しているが、このうちの九街区にある建物は、日本の支配下にあった時期に建てられた建物であった。大連市政府は、それを保存建築とし、さらに、一九五〇年に建てられた大連市人民文化倶楽部の建物も、両隣にある旧横浜正金銀行大連支店と旧大清銀行大連分行の建物に外観を合わせるかたちで一九九〇年代に改修された。

このような現象は、植民地建築を単なる支配の象徴であり、現在に残った遺物として扱うことだけでなく、植民地建築の存在を認め、それぞれの地域の歴史を示す遺産として扱うものであり、さらに、その遺産を都市再開発の資産として認識するものであった。その象徴的出来事が、冒頭に記した旧京城府庁舎の取り壊し騒動である。韓国文化財庁の主張と行動は、植民地建築を文化財として扱う姿勢を明確にしたものであった。

このような植民地建築をめぐる動きの変化は、戦後六〇年以上が経ち、支配下にあった時間よりもその後の時間の方が長くなってきた中で、とくにケンチュウになってきている。そして、その変化

は、植民地建築が変化したのではなく、それを扱う人間の意識が変化したのである。したがって、植民地建築であるという厳然たる事実はずっと残るのである。

しかし、植民地建築をめぐる昨今の動きを見れば、植民地建築を支配の遺物であるというだけの理由で抹殺することが難しいこともわかる。植民地建築が支配を示す存在である以上、その抹殺は事実の抹殺であり、日本の支配を歴史上から消し去る行為である。 D、旧朝鮮総督府庁舎

の部材の一部は忠清南道天安市にある独立記念館において野外芸術作品として屋外展示されているが、それは、建物を破壊しても、部材の一部を残すことで支配の事実を後世に伝える役割を担っている。植民地建築と向かい合うことは、支配した国家と人々にとって、すなわち日本と日本人にとって、支配を直視することである。植民地建築を使い続けることは、支配を受けた国家と人々にとって、支配を受けたという歴史を乗り越える糧である。植民地建築の過去と現在を歴史教育の題材として使うことができるなら、歴史認識をめぐる東アジア諸国の軋轢は解消できると思う。そこに植民地建築の未来が開けると思う。

(西澤泰彦『日本の植民地建築』)

問一 二重傍線部 a～e のカタカナを漢字にそれぞれ直しなさい。

問二 空欄 A D に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|-------|---|---|---------|
| A | ア | そのかわり | B | ア | そのうえ |
| | イ | そのため | | イ | そうだとしても |
| | ウ | すなわち | | ウ | それに対して |
| | エ | しかし | | エ | それゆえ |
| | | | | | |
| C | ア | ところで | D | ア | おまけに |
| | イ | そのくせ | | イ | ともあれ |
| | ウ | したがって | | ウ | たとえば |
| | エ | だが | | エ | とりわけ |

問三 傍線部1「ソウル市と韓国文化財庁との対立」とあるが、それぞれの組織の植民地建築に対する考え方の違いについて述べた次の文の空欄 i ・ ii に入る最も適切な言葉を、本文中から抜き出しなさい。

ソウル市は、旧市庁舎前広場の背景としての外壁を i すれば、他の部分はい ii でよいと考えたが、韓国文化財庁は、旧京城府庁舎の植民地建築としての価値を認め、 ii を作ることは文化財の破壊につながるとして容認しなかった。

問四 傍線部2「旧朝鮮総督府庁舎」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものをつ選びなさい。

ア 旧朝鮮総督府庁舎は、大韓民国の首都機能の移転にともない、中央庁舎としてソウル南方の果川に移転した。

イ 旧朝鮮総督府庁舎は、韓国国立中央博物館に転用され、一九八六年のアジア大会に合わせて開館した。

ウ 旧朝鮮総督府庁舎は、日韓新時代の創出が両国の時の政権によって合意された後で、取り壊されることとなった。

エ 一九二六年に竣工した旧朝鮮総督府庁舎は、当時の京都市の近代化と植民地支配を示す建物となった。

オ 日本による支配の象徴であった旧朝鮮総督府庁舎は、日本の敗戦から五〇年目に取り壊しを開始された。

問五 傍線部3「取り壊された植民地建築は少なく、積極的に取り壊されたものは各地に建てられた神社や忠霊塔のみであった」とあるが、このことについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 植民地支配が解けた後も一九八〇年代までに経済発展を経験する以前は、取り壊された植民地建築は少なく、利用され続けた。

イ 急速な経済発展が植民地建築の建て替えを可能にし、新しい建築は支配された時代よりも発展したことを示す象徴となった。

ウ 旧台湾総督府庁舎は、国共内戦に敗れ台湾に移った中国国民党政権によって中華民国総統府庁舎として利用されることで、権力の移行を示した。

エ 日本の降伏から五〇年後に、景福宮の復元という目的のもと旧朝鮮総督府庁舎が取り壊されたのは、支配の克服を意味していた。

オ 国共内戦に勝利した中国共産党は各地の地方委員会を中心に急速に経済発展を遂げ、もはや植民地建築を再利用する必要はなくなった。

問六 傍線部4「植民地建築に対する新たな動きが生じた」とあるが、そのような動きについて述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 共同調査の成果である『中国近代建築総覧』に基づき、ハルビン市政府は一九四九年以前の主要な建物を保存する事業に着手した。

イ 韓国と中国では植民地建築の文化的価値を認め、外国の支配を受けた時期の建築も自国の建築史の中に位置づけようとする学術研究が始まった。

ウ 韓国と中国では植民地建築を日本の支配の象徴とみなし歴史に刻みこもうとしていたが、戦後の経済発展につれて植民地建築そのものの存在を否定し始めた。

エ ハルビンと大連では、日本の大学が調査に協力したため、日本の支配下にあった時期に建てられた建物の保護が図られた。

オ 韓国と中国では植民地建築を保護の対象とし、それぞれの地域の歴史を示す価値ある遺産とみなし、それらを都市再開発の資産として認識しだした。

問七 傍線部5「植民地建築の過去と現在を歴史教育の題材として使う」とはどうすることだと筆者は考えているか。本文中の言葉を用いて七十字以内で答えなさい。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

情報を受けとると、心のなかには何らかの意味作用が発生する。自分にとって興味深いもの、刺激的なもの、重要なものが、意味作用発生のプロセスで自然に選択され、重要でないものや既知のものは、すぐに忘れられてしまう。あるいはもともと認知作用から抜け落ちてしまう。この選択をおこなっているのは、意識というよりむしろ無意識であり、身体である。くだらない例だが、一夜漬けて丸暗記した試験勉強の知識はたちまち消えてしまうのに、全身が震えるほど感動した音楽の響きはいつまでも記憶に残るものだ。

ここで大切なのは、意味作用と関わるのは人間だけではないということである。イヌやネコも、餌、敵、異性などを諸々の知覚(触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚)で認知し、敏感に反応するが、これも立派な意味作用である。身体こそが意味作用発生の原器なのであり、身体をもつ動物は、それぞれの種に特有の意味作用をもとに生体活動をつづけている。

あらためて「意味」と生命活動の関係をとらえ直してみよう。どんな生命体も、生きるために「有意味な対象」を認知し選択するという行為をおこなっている。たとえばカエルは、黒い小さな飛翔物を、餌のハエだと思つてとびつく。もしそれが本当にハエだったら、その選択はただしく、カエルは栄養物を摂取することになる。このように、「意味⇨価値」とは、選択行為とともに事後的に出現するものなのだ。カエルは、過去にとらえたハエのパターンの記憶にもとづいて目前のハエを認知し捕捉する。それがまた記憶される。こういったカエルの自己準拠的・再帰的な行為とともに、「意味⇨価値」が循環的に出現することになる。飛翔体をただしくハエだと「意味」づけたカエルは生き長らえるだろうが、ゴミばかりにとびつくカエルはやがて死んでしまう。要するに、「意味」とは本来、生命体の生体活動(選択行為)と不可分の存在なのだ。

人間の心に生じる複雑微妙な意味作用も、この生命活動の延長上にある。たとえば読書をしているとき、われわれは、自分の記憶している言語的な概念にもとづいて文章の意味を解釈する。そしてその解釈が自分の記憶にフィードバックされ、記憶のなかの言語概念も刻々と変化していく。読書体験とは、そういう自己準拠的・再帰的・循環的なプロセスに他ならない。

そもそも、動物と人間を峻別することは古臭い思想で、二二世紀の今日、(A)科学的とは言えない。西洋人文学の伝統である人間中心主義思想は、現代の生態学やネオ・ダーウィニズムによって実証的に否定された。一七世紀の偉い哲学者デカルトは、理性をもつ人間だけを特別扱いし、残りの動物は機械的存在だと考えたらしいが、なんとこの不遜な思い込みだろうか。今やそんなことを信じている生物学者や脳科学者は誰もいない。われわれ人間も、イヌやネコやサルと同様、共通の祖先である原始的哺乳類から枝分かれし、徐々に進化してきた動物の一種なのである。ペット

愛好家なら、機械とちがつて動物には愛情表現があると賛同してくれるはずだ。確かに、意識的な理性をもつ動物はたぶん人間だけだろう。だが、そのことはむしろ逆に、われわれの思考の大部分が無意識的な身体活動にもとづいており、意識的な理性にもとづく判断など、大脳新皮質でおこなわれているごく一部分にすぎないという冷厳な事実を示唆するのだ。

IT（情報技術）は日夜進歩している。だが、同様に情報処理をしているようでも、コンピュータと人間とのあいだに、本質的な違いは歴然とある。² 身体がなく、生きていくわけでもないコンピュータの内部に、人間のような意味作用が発生し、喜怒哀楽の感情が出現することなど、鉄腕アトム好きの見果てぬ妄想である。コンピュータとは、人間が外部から与えたアルゴリズム（算法手順）にしたがって論理記号を操作し、人間の意識的な思考を高速で模擬するシミュレータであり、それ以上でも以下でもない。いかに有用でも、原理上の限界があるのだ。（B）、ネット集合知を実現するときも、ITを過信せず、有効に活用するためのいっそう精密な思索が不可欠となるのである。

³ 生命体も機械も「システム」である。システムとは、互いに関連する多数の構成素からできていて、何らかの作動をおこなう存在だ。実は生命体と機械がシステムとしてどう違うかについては、昔から学問的論争がつづいてきた。そして、両者の相違をあざやかに示したのは「オートポイエシス（Autopoiesis）理論」である。これは、チリの生物学者ウンベルト・マトウラーナとその弟子フランシスコ・ヴァレラによって一九七〇〜八〇年代に提唱された驚くべき理論だ。九〇年代に入ると科学哲学者河本英夫によって日本にも紹介され、それ以降かなりの注目を集めてきた。ただ、科学理論といっても哲学的で用語も難解なので、ひろく社会で理解され受容されているとは言えない。だが実は、その本質はあつげに取られるほど簡明なのである。

「オート（auto）」とはギリシア語で「自己」のこと、「ポイエシス（poiesis）」とは「制作」のことだ。だからオートポイエシスとは「自分で自分をつくること」に他ならない（「自己創出」などと訳されることもある）。生命体が自分で自分をつくりあげるシステムであることは明らかだろう。われわれの脳細胞も、脳細胞からできあがる。脳のなかの記憶もまた、過去の記憶をもとに更新され、蓄積されていく。そこには自己準拠的・循環的な作動がぐるぐると繰り返されている。誰かが設計図を引いて、外部から所与の機能をつくりこんだわけでは決していない。だからいくら研究しても、生命体の再生産機構には神秘的な謎がのこる。一方、コンピュータのような機械システムは、基本的に、人間が設計図を描き、電子回路を組み立て、外部からプログラムをつくりこんだ存在である。機械は自分で自分をつくることはできない。このように、他者によってつくられること、あるいは他者をつくりあげることを「アロポイエシス」という。「アロ（allo）」とは「他者・異物」のことだ。機械は自分自身をつくれませんが、人間に役立つ何かを出力生産する。生命体である人間は「オートポイエティック・システム（autopoietic system）」、機械であるコンピュー

タは「アロポイエティック・システム (allopoietic system)」とこうわけだ。

〔中略〕

オートポイエティック・システム (生命体) とアロポイエティック・システム (機械) の最大の相違は何か。——前者は「閉鎖系」なの以後者は「開放系」だということだ。

(C)、システム論的にいうと、生命体は閉じているのに、機械は開いているというわけだが、これは少し不思議な感じもする。まず、コンピュータのような機械システムが原理的にオープンだというのは当然だろう。入力データが外部から加えられると、コンピュータは、あらかじめプログラムがつくりこんだメモリ内のプログラムにしたがってデータを処理し、出力データを生み出す。

その機構は明快に分析できるし、完全な開放系に他ならない。一方、生命体である人間は、外部から光や音などの知覚情報を受けとり、それを脳神経で処理して、何らかの行動を起こす——このように見なすと、コンピュータと大差ないように見えるかもしれないし、実際、二〇世紀半ばの古典的サイバネティクスではそう考えた。

しかしよく考えると、両者のあいだには大きな相違がある。われわれが音楽を聴いたり、絵を観たりしたとき、それを身体内でどんな機構で「処理」しているのかは解明されていない。同じ曲や同じ絵でも、受ける印象は個人によって千差万別だし、同一人物でも、体調や気分など種々の状況によって、感動したりしなかったりする。他人がつくったプログラム通りに鑑賞しているのではないのだ。そこにまず、閉鎖性⁴につながる不透明性がある。

実はこの不透明性が、オートポイエーシス理論提唱のきっかけとなった。創始者マトウラーナは、ハトの目にいろいろな波長の光を当て、視神経の反応を調べていた。ところが、実験の結果、波長と視神経の反応のあいだに、はっきりした因果関係を見出すことがどうしてもできなかったのである。たとえば赤い光を当てたら視神経のこの部分がこれくらい興奮する、といった明快な結果は全然えられなかった。もしハトが機械だったら、辛抱強く調査すればそれなりの因果関係を見出すことはできるはずだが、いったいなぜ駄目だったのか。——マトウラーナの出した結論は「ハトの視神経の反応は、過去の体験や記憶にもとづいて内部的に決まってくる」というものだった。外部から加えられる光は、単なる刺激にすぎない。ハトは刺激をうけて独自のやり方で反応するが、内部で自己準拠的に作動しているだけなので、外部からはうまく説明できないのである。

要するに、ハトは徹頭徹尾、動物行動学ⁱⁱの鼻祖である生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルという「環世界 (Umwelt)」つまり主観的な世界のなかで生きている。その世界は、ハトの生存体験をつうじて自律的に内側からつくられるものであり、外側からの指令で他律的につくられるものではない。だから「閉じている」のだ。

閉鎖系であるオートポイエティック・システムには、開放系であるアロポイエティック・システムと違って、明確な入出力関係がない。したがって、外部からその作動を正確に予測することはで

きない。要するに、ある刺激に対してどう反応するか、よく分からないのである。これは人間の心を思いだせば、誰しも納得するだろう。同じことを言っても、いつもは笑いだす恋人が急に怒りだすこともある。人間はそれぞれ主観世界の住人で、コミュニケーションが常に成功するとは限らない。

先日、都心でクルマがビュンビュン往来するなか、赤信号の横断歩道を平然とゆっくり渡っている中年女性がいたが、その目はどこか遠くを見つめ、急ブレーキの音も耳に入らないようだった。彼女の心中は、彼女以外には誰にも分からない。こういう閉鎖的な不透明性は、複雑大規模なコンピュータにやどる暗部とはまったく異質なものだ。入り組んだプログラムの動作分析はただ面倒千万なだけだが、人間の心の謎は永遠にかぎりなく深い。

むろん、生命体の内部に何らかのルールがあると仮定し、その反応をある程度予測することは可能である。多くの生物学者はむしろそのルールを見出そうとしているとも言えるだろう。だが、ここでの「ルール」は、外部からつくりこまれた明確なプログラムとは根本的に違う。生命体が自己準拠的・循環的に作動していれば、おのずと習慣性が生まれ、まるでルールにもとづいて作動しているように見えるのである。環境条件が同じなら、習慣性にもとづいて同じ反応を繰り返すかもしれないが、環境条件が変われば、生存するため新しい反応をつくりだす。それが生命体というものなのだ。つねに変化する環境条件への驚くべき適応が、生物進化をもたらしてきたのである。

（西垣通『ネット社会の「正義」とは何か——集合知と新しい民主主義——』一部改変）

* サイバネティクス：機械の自動制御や動物の神経系機能の類似性や関連性をテーマに研究する、心理学、生物学、物理学、数学等を包括した科学の総称。第二次大戦後、米国の数学者ノーバート・ウィーナーが提唱した。

問一 波線部 i・ii の意味として最も適切なものを、ア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i 不遜な

ア うつつを抜かしている様子

イ 思いがっている様子

ウ 自信に溢れている様子

エ 人を威圧する様子

ii 鼻祖

ア あることを最初に始めた人

イ ある分野の中心となっている人

ウ 先頭に立ち他の人たちを導く人

エ 物事の起こるきっかけとなった人

問二 空欄（ A ）（ B ）（ C ）に入る最も適切な言葉を、ア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|---|---------|---|---|-----|
| A | ア | かねて | B | ア | しかしながら | C | ア | しかし |
| | イ | まさか | | イ | そればかりか | | イ | ただし |
| | ウ | もっぱら | | ウ | だからこそ | | ウ | つまり |
| | エ | もはや | | エ | とはいうものの | | エ | ゆえに |

問三 傍線部1「意味」と生命活動の関係」について説明した次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア ある対象が生命体にとって価値があるときにのみ、その対象を選択することに意味が生まれ、同じ選択が循環する。
- イ ある対象を認知して行動した結果、生き長らえることができたならば、その対象は生命体にとって意味がある。
- ウ 生命体にとっての意味とは、自分の生存に重要であることであり、生命体は生得的に意味ある対象を選択する行為をおこなっている。
- エ 生命体にとっての意味とは価値と同義であり、生きるために行動するには、対象の意味を事前に認知する必要がある。
- オ 生命体は生きるために、対象の意味を記憶にもとづいて認知し、価値あるものだと意味づけたときにだけ、再帰的に行動する。

問四 傍線部2「身体がなく、生きていないわけでもないコンピュータの内部に、人間のような意味作用が発生し、喜怒哀楽の感情が出現すること」はないとするのは、身体をどのようなものであるとする筆者の考えにもとづいているか。このことを述べる一文の最初の五文字を抜き出しなさい。

問五 傍線部3「生命体も機械も「システム」である」とあるが、これについて述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 機械システムの一つであるコンピュータが生命体システムである人間の思考をシミュレートしたものであるように、機械は生命体を模倣したものである。

イ 生命体は五感を通して外部に開かれたシステムであるのに対し、機械は他からプログラムを与えられた閉じたシステムである。

ウ システムとしての生命体と機械とは、外部からの入力情報を内部で処理し、その結果を外部に返すという点で似ている。

エ 生命体も機械もさまざまな要素から構成され、それら構成素の相互参照と自己準拠によって処理をおこなっている。

オ システムとしての生命体と機械とは、与えられた内部プログラムの処理方法において大きく異なっている。

問六 傍線部4「閉鎖性につながる不透明性」とあるが、オートポイエティック・システムが不透明である理由を、本文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア デカルトは理性をもつ人間と動物とを区別したが、人間の思考の大部分は、動物と同じく身体的な活動にもとづくものである。

イ 人間の心は複雑微妙で気まぐれに変化する謎めいたものであり、入り組んだコンピュータの内の暗部と同じように面倒なものである。

ウ マトウラーナはハトを用いた実験で明確な結果を出すことができず、対象を機械に変えたことでオートポイエーシス理論を提唱した。

エ オートポイエティック・システムとアロポイエティック・システムとの違いの一つは、外部に対して開いているか閉じているかである。

オ 人間が時には失敗しながらもコミュニケーションがとれるのは、自分の主観的世界とは別に習慣からくるルールがあるからである。